

昭和43年3月卒業

横川 正知

昭和43(1968)年3月に高田商業高校卒業。長野県信濃町から高田商業高校に入学し、3年間田口駅(現 妙高高原駅)からの遠距離通学でした。入学当初の列車は蒸気機関車(SL)で、通学生は一般的に「汽車通生」(当時の呼称)と呼ばれ、スス混じりの煙を吸いながらの通学でした。

因みに、翌年半ばには長野一直江津間が電化となり、煙から解放されたと記憶しています。

また、二本木駅ではスイッチバックの存在を初めて体験しました。信濃町からは私のほかにも数名の同級生が高田商業高校に進学しています。

卒業後は信濃町役場に就職しました。自宅は農家でしたので休日には汗まみれの農作業にも従事しました。役場では行政の様々な仕事を通じて社会の仕組みを学び、住民の暮らしに寄り添う仕事に誇りと責任を感じながら、郷土を愛する気持ちをもって誠心誠意努めてきました。

平成15(2003)年4月から4年ほど信濃町助役を勤め、平成22(2010)年の町長選挙に立候補しました。人口減少や住民の高齢化で元気をなくしている町の活性化を目指しての立候補でしたが、力及ばず現職町長に敗れ落選しました。そして平成26(2014)年、2度目の挑戦で多くの町民からの支持を得て、信濃町長に初当選することができました。



初登庁

新潟県に隣接し長野県北部に位置する人口約9千人(2015年時)の信濃町は、昭和31(1956)年に信濃村・古間村・信濃尻村が合併して発足。古来この地方は北信濃あるいは奥信濃ともいわれており、合併後の町名は旧国名(信濃国)から信濃町とされました。

俳人小林一茶生誕の地であり、また美しい湖面とナウマンゾウで有名な野尻湖や黒姫高原を擁する自然豊かな文化の香りがする町・観光地でもあります。

信濃町長は令和4年までの2期8年の在任でした。この間、町の停滞や閉塞感を何とか改善したいと自分なりに様々な取り組みをしてきました。人口減少という大波は日本全体の傾向で、一町村単位での克



服は難しい課題ではありますが、少しでも子育てしやすい環境整備や若者の定住、あるいは町外からの移住促進、また観光資源の有効活用や地場農業・林業の維持・振興等の施策を町民と共に考えてきました。

平成27(2015)年、「第16回米・食味分析鑑定コンクール：国際大会」において、町内農家さんの丹精込めて栽培・収穫した米が、国際総合部門で2年連続の金賞を受賞しました。米・食味鑑定士協会が主催する国内最大の「お米のコンクール」です。

私自身農家の出身で、自分のことのように嬉しく思うとともに、受賞に至るまでの農家さんの努力に敬意を表する気持ちで一杯でした。信濃町としても越後に負けない米も作れるんだと誇らしく思います。

当の農家さんは「金賞を取っただけでは、お米は売れません。いいものをつくり、もっと産地の情報を発信していきたいと思っています」と、更なる飛躍を誓われました。町としても大いにバックアップしたいという気持ちを新たにしました次第です。



信濃町の大きな記念行事としては、平成28(2016)年9月25日に町制施行60周年記念式典を挙行了しました。多くの方々をお招きして共に町史60年の節目を祝うことができました。信濃町に生まれ育った者として、先人の苦勞と功績に思いを馳せつつ、微力ながら更なる発展に少しでも寄与することを再認識する機会となりました。

また町財政が厳しいなか、町立信越病院の移転新築の決断など、他にも多くの記憶に残る思い出があります。



そして、信濃町を語る上で欠かせない方が、英国出身の作家で環境保護活動家のC. W. ニコルさんです。

ニコルさんは昭和55(1980)年に来県され、同61(1986)年から荒れ果てた信濃町の里山を購入し「アフアの森」と名づけ、森の再生活動に取り組んできました。当時私は役場の社会教育係(教育委員会)に勤務していましたので、担当外という事もあり直接ニコルさんとの接点はあまり多くはありませんでしたが、町では官民挙げてニコルさんの活動に共感し、自然保護のために共に活動してきました。長野県では平成23(2011)年に「森林大使」を委嘱し、森林づくりや森林資源の利活用のPR活動等に協力してもらいました。



アフア(afan)とは、ケルトの言葉で「風の通るところ(谷)」という意味とのこと。アフアの森を再生させようとしたきっかけになったのは、ニコルさんの故郷であるウェールズの「アフア森林公園(Afan Forest Park)(国立公園)」でした。石炭採掘でハゲ山だった場所が見事に森に再生されたその事実を見て「僕もやろう」と、ニコルさんは日本で私財をなげうって放置林を購入し、手を入れ始めたということです。

平成28(2016)年6月に、全国植樹祭開催中の長野県を訪問された天皇皇后両陛下が来町され、ニコルさんが保護するアフアの森を視察されています。

そして両陛下が昼食をとられるために役場にお越しになり、信濃町長として昼食会場で同席させていただくという栄誉にあずかりました。県知事・議会議長の方々が同席される中、陛下のすぐ右隣に着座させていただき、親しくお言葉をかけていただくという大変光栄なひと時を過ごすことが出来ました。また、テーブルをはさんで皇后さまの優しいお言葉も拝聴させていただき、私の在任中一番の貴重な思い出となりました。



天皇皇后両陛下行幸啓(信濃町役場)

昨年、任期満了による町長改選に当たり、自身の身体的事由もあって3期目の立候補をしないことにしました。後継の新町長は県職員出身の方で、中央とのパイプを生かして郷里信濃町のために尽力していただきたいと思っています。

信濃町長という公職を辞してから約1年、町を預かる重責から解放されて現在は家業である農業に汗しながら、信濃の里の自然に改めてありがたさと感謝の念を感じています。引退してからの悠々自適あるいは晴耕雨読という言葉に憧れていましたが、現実には残念ながらまだその域には至っていません。僅かながらの田畑を耕しながらも、信濃町々民として出来ることは協力し、町の更なる発展を見守っていきたいと思っています。

思えば母校高田商業高校を卒業して半世紀が過ぎました。県をまたいでの遠距離通学(越境入学生)で通学に時間がとられ、残念ながら時間的に余裕のある学校生活、特に十分な部活動ができませんでした。しかしながら商業科の授業で学んだ、物事を経済的側面から考える視点は、町の行政を担う上でも大いに役に立ちました。

当時のお堀に面した校舎は現在南城高校になっていますが、私の心の中には桜舞う学び舎や青春真っ盛りの級友たちの姿は郷愁と共に健在で、高田商業高校での学び・体験は今でも私の原点・誇りとなっています。

そして鮫城健児として机を並べた私たちは戦後のベビーブーマー(昭和22~24年生まれ)で、作家の堺屋太一が「団塊の世代」と命名した世代です。人口が突出して多く、小・中・高といつもすし詰め教室で、受験・就職競争を始め人生の節目々々が競争の連続でした。反面、歩む時代が戦後の高度経済成長期に重なり、おしなべて皆が豊かになった世代でもありました。



この度母校同窓会のホームページ更新に当たり、OBとして寄稿せよとの仰せがありました。自分に資格があるか迷いましたが、改めて自身のこれまでの来し方を振り返る機会を頂いたと思い、拙文を記すことと致しました。取り留めのない記述となりましたが此処までご一読下さり、ありがとうございました。

最後に、このような場を頂いたことに感謝しつつ、母校高田商業高校の益々のご発展とご活躍をお祈り申し上げ結びといたします。

令和5(2023)年11月 吉日